

文部科学大臣 萩生田光一 様
文化庁長官 宮田亮平 様

あいちトリエンナーレの国の対応について。

それぞれの専門家、芸術家のみなさまが既に多くの発言をされているため、助成金を申請する立場のただの一ボランティアグループの代表としてお願いさせていただきます。

何らかの活動をしている者にとって「助成金」というのは大変ありがたく、それを得るためには申請、審査、によって厳しく選考があって頂けるものと思っております。

ですからそこがなければ動けず、決定があったからこそ取り組みを進められます。

助成を受けることが決定した時点で、自分たちが行おうとしていることは「認めて頂けた」と解釈します。

ところが今回、そうした流れを無視した助成取りやめのご判断がなされました。

今後こうしたことが国の機関で平気でされるというのは根底の信頼が崩壊します。

今回のこともテロを一つの理由に挙げられましたが、これは犯人側の問題であって、犯人を捕まえることが先決であります。安全確保のため一時的に閉館となっても開催はおこなわれるべきものでした。芸術祭側は被害者です。

また数々の「主観」が取り上げられていましたが、精査して許可した以上、どんな主観があろうとも、丁寧な説明をさせることで開催中止・助成取りやめは回避できたのではないのでしょうか。

勿論説明責任に関しては国だけではなく、主催側もすべきことであると思っています。「不快である」「一刻も撤去を」という意見に対して「表現の不自由」がテーマであるならまさにそれこそがテーマの本質に近いできごとだったのではないのでしょうか。

作者の意図を作者自身が語り(問題提起作品であるなら尚更)、主催側もその説明を丁寧に行い、理解を求めることになる、ある意味よい機会だったのかもしれないです。

国際的な問題を含んでいる内容を展示し開催する以上、説明を省いたり、乱暴に中止したり、挙句は助成金とりやめなど言語道断だと感じます。

日本の国が誤った方向に向かないよう祈るばかりです。

伊東郁乃

(2019 年 10 月 07 日)